



発行所
 社団法人 国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都渋谷区東1-13-1-402
 振替 00170-1-60507
 電話 03-5468-6230
 F A X 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部
 毎月一回10日発行
 購読料 年間2000円

「聴く」といふ事

「総合的な人間力の基盤としての国語力」について

岩越豊雄

「これからの時代に求められる国語力について」と題する文化審議会の答申には、国語力は「コミュニケーション能力の基盤」であって、同時に「知的活動の基盤」「感性・情緒の基盤」である旨が述べられてゐる。また、最近の日本の社会に見られる人心の荒廃や人間関係能力の衰へは、総合的な人間力の基盤としての国語力が十分育成されてゐないことが大きく関わつてゐるとも指摘されてゐる。

さうしたこともあつて、校内研究のテーマを『聴き合い、伝え合い、響き合える子をめざして』と改め、研究に取り組むことにした。「生きる力」と「確かな学力」を身に付けさせる学習をどう展開するかを考へた時に、『聴き合い、伝え合い、響き合う』ことが、

まづ基本だと思つたからである。

『聴き合う』の「聴」といふ字は人の真心、つまり、相手の思ひや願ひなど、ありのままの心を、素直に聴き取るといふ意味が込められた漢字だといふ。学級作りの基本は、まづ、このやうな、人の話をよく聴く態度を養ふところにあると、最近つくづく思ふやうになつた。よい授業は大抵、子供達がよく話を聴いてゐる。さうした、お互ひの話を聴き合ひ認め合ひ、温かな雰囲気の話でこそ、皆が向上しようとする意欲も湧いて来る。

「話し上手より、聴き上手」といふ言葉がある。日常の会話でも、よく聴いてくれる人があるると、自分の考へが、豊かに引き出され、深められるといふことを、多くの人が体験してゐるので

はなからうか。

とするならば、話す側は、単に自己を表出するといふのではなく、常に相手を考へ、相手に伝はるやうに表現することが求められる。さうした意味で、相手の目を見て話す、はっきりした声や言葉で話す、分りやすく表現する等々の努力や態度が大切になる。そして、その基盤となる言葉についての感受性を養ふことが重要となる。

さうした心と態度が育つてこそ「君語り、吾聴く」といふ双方の『響き合う』共感の関係が生れてくるのではなからうか。それこそが、共

生の時代に求められる資質能力であり、総合的な人間力の基盤としての国語力だと思ふ。そのやうな、豊かな国語力を身につけさせる方策として、答申では、「読書の大切さ」を強調してゐる。たしかに朝の読書や読み聞かせは大変有効である。朝、静かに読書に取り組む姿、ボランティアのお母さんの読み聞かせに熱心に耳を傾ける児童の姿に、子供達が自然に言葉を豊かにし、心の成長により影響を受けてゐることを実感してゐる。

現在、問題になつてゐる「総合学習」も、具体的な事物や人、社会、自然に係りながら、自分達の興味や

関心のある課題を追究する。その結果が、自分にも、人にも役立つ学習となることがポイントであらう。そのためには、その成果をまとめ、他に情報発信することが必要になる。人に分るやうに纏めたり、表現したりすることを通して、プレゼンテーション能力など、生きた国語力を養ふことになる。このやうに、「個」の尊重に基本を置く今の教育に欠けてゐる「他者への配慮」や「人の役に立つ喜び」「人のつながりの大切さ」を、聴くことを通して体験的に学ぶことになるのである。

特に、人の話を虚心に聴くことは易しいやうであつて、実は大変難しいことだと痛感してゐる。勝鬘経義疏に「聡慧利根通敏にして悟り易し」といふ言葉がある。その解説に「耳を傾けて真剣に聴くことを『聡』といひ、心に明らかに思ふことを『慧』といふ、通敏にして悟り易しとは、人の言葉を聴いて、その言葉にこもる深い意味内容まで達することを『通』と言ふ、善く聴くからそこに到るのである」とある。論語にも「耳順」とある。人の話を虚心に聴くことができるといふ意味である。耳順の六は過ぎた。さうありたいと思ふ。(小田原市立天作小学校長 数へ年六十二歳)